

出野尾洞穴遺跡出土土器の検討

—房総半島南端における縄紋時代前期末葉の異系統土器—

近江 哲

1. はじめに

千葉大学文学部考古学研究室では、1992年より房総半島南端部の安房地域における海食洞穴遺跡を中心とした継続的な調査を実施している。縄紋海進期以降の隆起現象を解明する一助となった館山市大寺山洞穴遺跡や縄紋時代早期の海底遺跡である沖ノ島遺跡などは、その代表的な調査である。2011年には海岸段丘上に立地する館山市出野尾洞穴遺跡の発掘調査が行われ、発掘調査概報が刊行された（千葉大学考古学研究室 2012:以下、概報）。1954年に発掘調査がなされた出野尾洞穴遺跡は、縄紋土器、須恵器・土師器に加えて人骨が出土した洞穴遺跡として知られており、縄紋土器の古いものには「諸磯式」が出土したとされていた。しかし、長年その実態は明らかにならず、館山市史などに概略が掲載されたに過ぎなかった（館山市史編纂委員会 1981）¹⁾。千葉大学で実施した2011年の調査では、1954年調査では未発掘であった箇所に着手した結果、前期末葉～中期初頭、後期前葉の遺物が出土し、比較的限られた時期の短期間に利用されたと考えられ注目された。

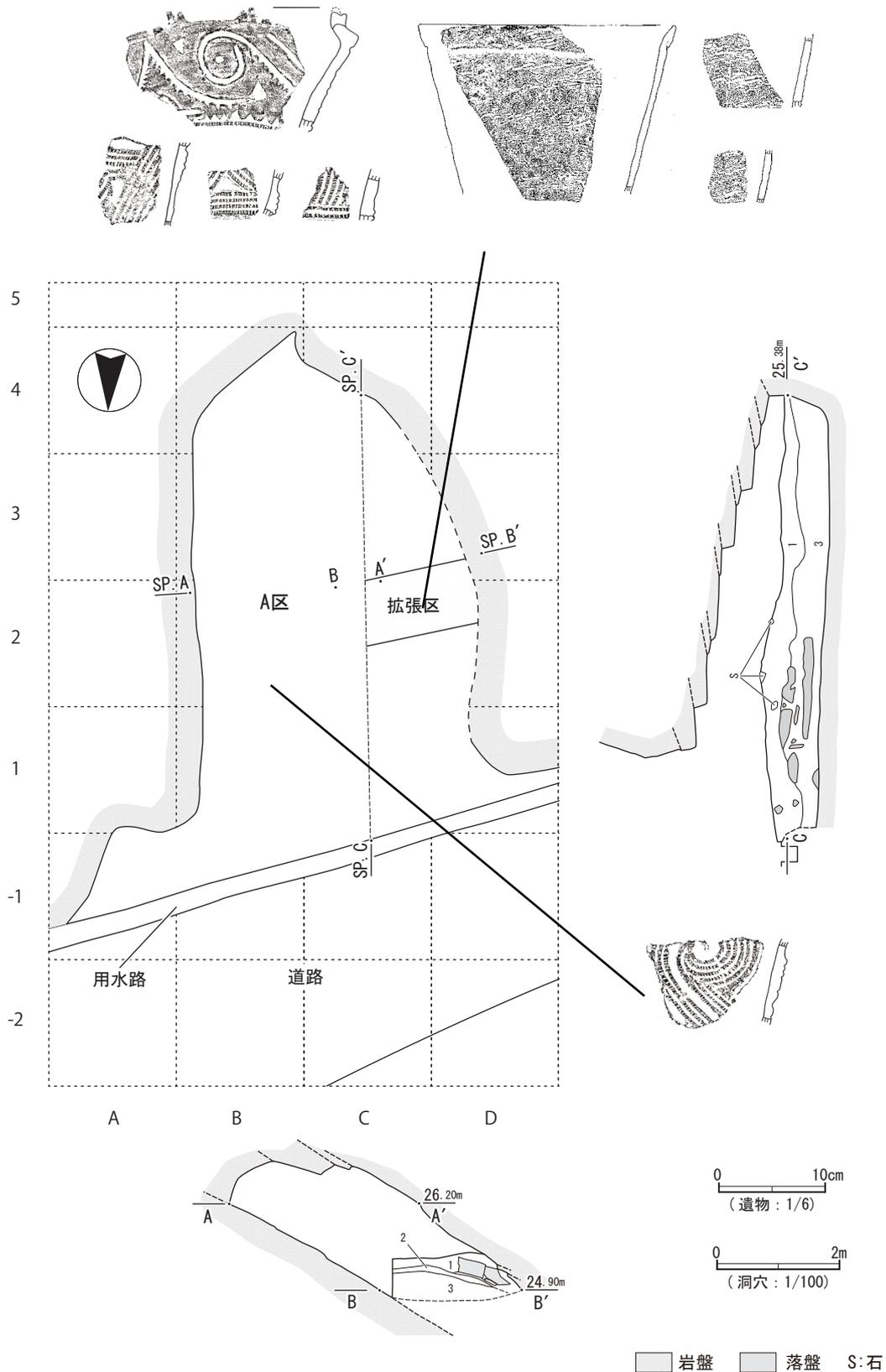
数日ではあったがOBとして発掘調査に参加する機会を得、洞穴内の出土状況などを詳細に観察することが出来た。発掘中に落盤直下より出土し注目された前期末葉の土器は、関東地方において異系統の土器に思われ、気にかかっていた。概報が刊行され、その内容を検討することが出来るようになり、時期としては前期末葉から中期初頭にかけての土器として報告されている。本稿では、出野尾洞穴遺跡出土土器のうち、この前期末葉の土器に焦点を絞って検討してみたい。

2. 出野尾洞穴遺跡の概要

出野尾洞穴遺跡は、1954年に千葉大学文学部の神尾明正が指導し、県立安房第一高等学校（現：安房高等学校）の郷土史研究部により発掘調査された。遺物の行方は長らく行方不明であったが、近年、館山市立博物館の収蔵庫から発見され、遺物の資料化がなされ概報に掲載されている。

この1954年調査の出野尾報告資料には「諸磯式」が見当たらず、前期末葉と考えられる角頭状の口縁部断面をもつ平行沈線文の破片があるに過ぎない。調査時には天井に達するほど土砂が堆積した状況で、最上部から土師器・須恵器とともに人骨が検出されたとある。その下層にいわゆる「貝塚」があって、縄紋前期の「諸磯式」の土器を出土したと記載されている（館山市史編纂委員会 1981）。2011年の千葉大学による調査では、神尾明正が調査を行った洞穴を第1洞とし、事前調査で把握された付近2箇所の洞穴も調査したが、2洞・3洞については遺物は出土していない。

以下は概報に沿って記述を行う。1洞の洞穴長軸に沿って東側に設定されたA区を基盤面まで掘削したが、土層断面から貝層の残存部を確認することは出来なかった（図1）。そこで西側に調査区を



- | | |
|--|--|
| <p>1層 黒褐色土層 (10YR2/3)</p> <p>2層 貝層 (10YR2/1)</p> <p>3層 暗褐色土層 (10YR3/4)</p> | <p>埋め戻し土。A区開口部側では、3層中と同質の砂岩(5YR4/1)の落盤を含む。A区中央では礫の混入が多い。二次堆積のマガキや二枚貝を含む。しまり・粘性やや弱。</p> <p>貝層残存部。やや黒色土が混じる。拡張区洞穴西壁側で、落盤に沿って傾斜し収束する。しまりやや弱、粘性やや強。</p> <p>1954年調査時の「赤色 soil」に対応。A区開口部～中央にかけて、砂岩の落盤と褐色土(10YR4/5)が交互に堆積する。洞奥部では基盤面付近で砂岩が堆積する。しまり・粘性強。</p> |
|--|--|

図1 出野尾洞穴遺跡 平面図・土層断面図・出土区

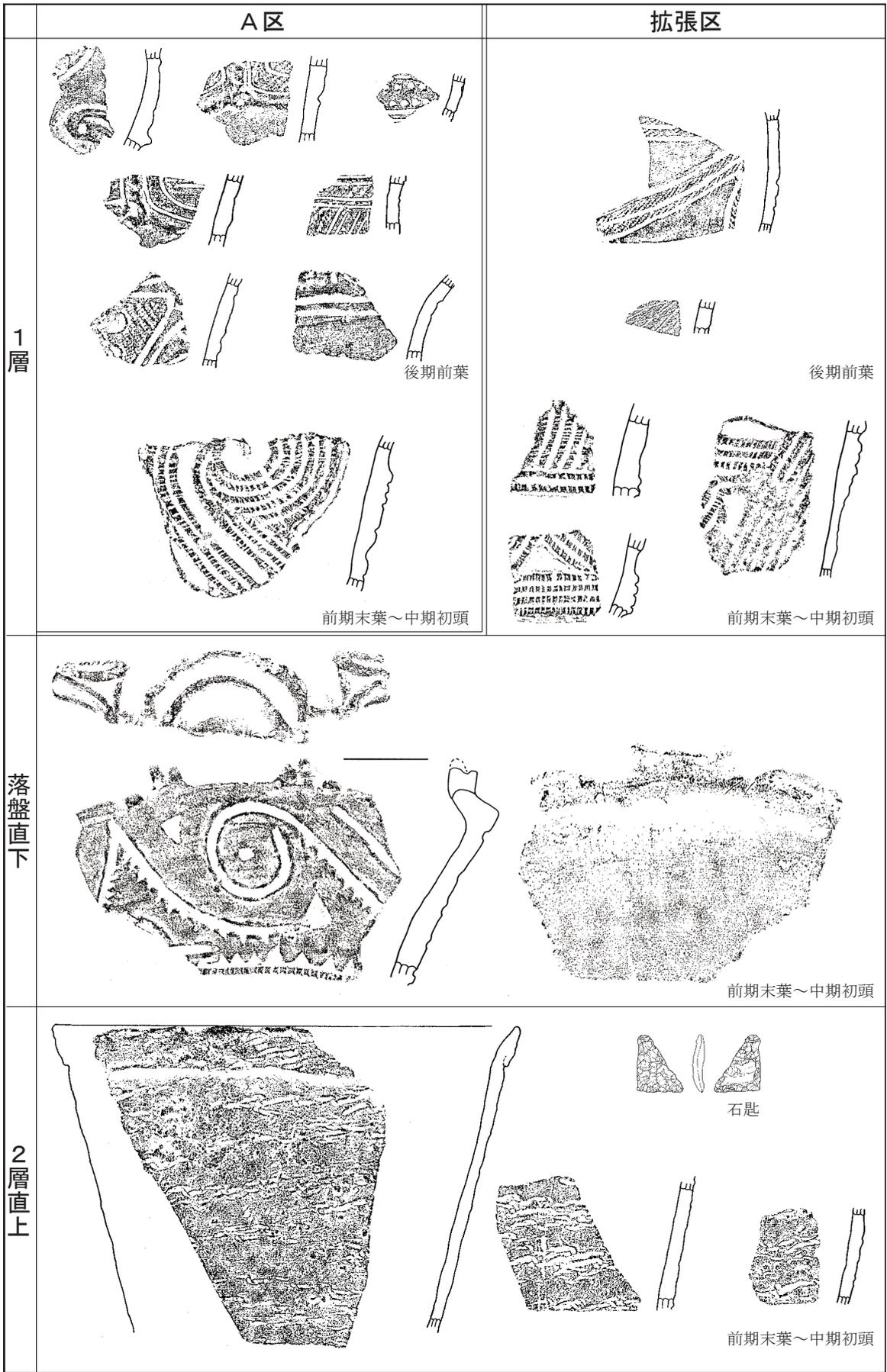


図2 出野尾洞穴遺跡 遺物出土層位

拡張したところ、1954年調査の埋め戻し土である1層の下位から大規模な落盤が確認された。1954年調査で作成された横断面図にも落盤が認められ、落盤面の下位レベルで局所的だが貝層の残存部が検出された。貝層からはマガキ・イボニシ・カガミガイなどが出土している。遺物は埋め戻し土の1層から前期末葉～中期初頭、後期前葉の土器、貝輪、垂飾が混在して出土、拡張区落盤直下と2層直上からは前期末葉～中期初頭の土器が出土している。

湧水のため洞穴の基底部までは掘削していないが、天井から貝の生痕化石が見つかった。また、洞穴の周辺では小河川の流路で波食台が確認された。このため、縄紋海進との関わりを含め、海食洞穴としての利用は限られた時期と考えられる。

3. 出土遺物の検討

さて、ここで出土遺物の検討をしたい。発掘調査時における私見としては、1層から出土していた前期末葉～中期初頭と考えられるヘラ切平行沈線文の胴部片と、落盤直下から出土した口縁部片は、胎土が似ているものの、全体の文様構成が判然としないため別個体と考えていた。該期の関東を考えると、沈線による渦巻文とヘラ切平行沈線の渦巻文が同一個体に施されるとは考えにくく、異系統とするにも少し異質であったためである。しかし、視野を広げて近隣地域の土器群と比較して、その系統を辿ると同一個体と見做すのが合理的と考えられる。概報に未掲載の資料としては、図化に耐えない小破片が数点あるに過ぎず、全体の文様構成などは知る事は出来ない。

器形としては口頸部から朝顔形に大きく開く平縁である。胴部は屈曲せずにほぼ直線的なものと考えられる。底部は出土していないが、胴部の形状から見るとやや小形であると推察される。

やや内折した口縁部の装飾帯には大きめの耳状突起があり、器周から見込み4箇所が付されると考えられる²⁾。この耳状突起は半円をなすが分厚く成形されており、太い凹線を入れることで重円文を分割したような形状をなしている。また突起の両脇は破損しているため不明瞭だが、粘土紐を貼付けをした隆線による対称なりボン形状になる突起が付けられている。

口縁部直下の文様帯は、滑沢に調整した器面に対して、丸棒状工具による1本沈線で連結渦巻文が表現されている。破損した左側の下端、右側の上部にも沈線が確認され、横位に渦巻文を展開し、その末端を連結したものと、開放したものが施文されたと推定される。器面の左下方で連結する沈線は、おそらく左方向に展開された渦巻文の終端を結び合わせるものであろう。連結渦巻文の下端には、鋭利だが稚拙な鋸歯文がヘラ状工具で施文される。口縁部の鋸歯状紋とは互い違いになるように配置されている。文様の描出法を比較すると、渦巻施文と鋸歯状文は先端が異なる施文具を使用しており、渦巻文様が丸棒状工具であるのに対し、鋸歯状文は切れ込みが鋭く、別種のヘラ状工具が用いられている。また施文順序としては、「渦巻文→三角印刻文」となっているので、施文具の持ち替え、もしくは交換が想定される。特筆されるのは、渦巻文様の左上と右下のヘラ状工具で施文された三角印刻文である。右下の三角印刻文には炭化物が付着しており不鮮明だが、左上と同様にヘラによる切削と考えられる。加えて右下の三角印刻文は、沈線の末端に重なっているため不明瞭であるが、渦巻文を施文した後の空白部に付加されている。渦巻文に対向して施文され、玉抱三叉文の原型とも思えるような配置をなしており注目される。中央の渦巻文に対し三角印刻文が左上・右下と斜めに配されているが、波状縁の場合は空白部の関係で渦巻文の左右に配されるのかもしれない。口頸部文様帯は鋸歯状の三角文で区画されている。渦巻文に沿う鋸歯文とは異なり、器面に対してやや垂直に施文され横位の境界観が強い。内面は無紋で平滑に仕上げられている。

次に胴部文様に眼を向けよう。ヘラ切平行沈線文による渦巻モチーフが1片あり、削取手法によ

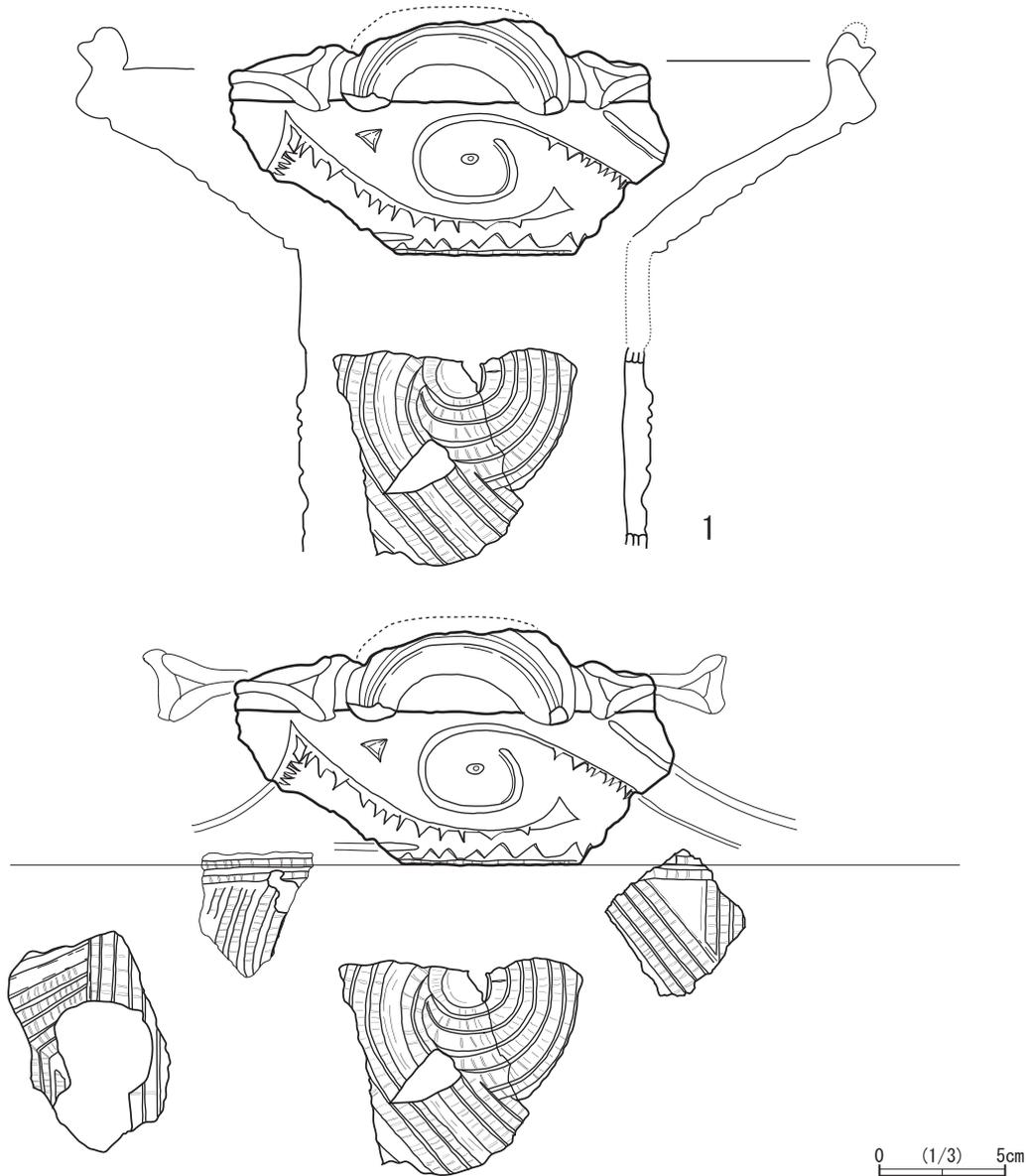


図3 出野尾洞穴遺跡 出土土器

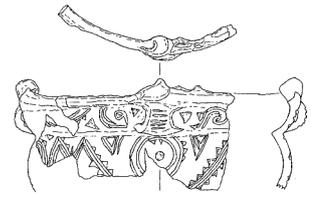
りヘラ切平行沈線文が施文された後に抉られている。このモチーフの上下端が判然としないため、文様帯構成が分からないが、器高はそれほど大形ではないので多帯構成にはならないと考えられる。口頸部区画に対し垂直な直線と渦巻曲線を併せもっており、区画される渦巻文と直線により組み合わせられた文様が4単位に作られているようにも見える。縦区画については、諸磯a式の二単位波状口縁にもみられるが、前期末葉の諸磯c式にはレンズ状区画による縦区画構成の意識がより顕著である。しかし、この土器は文様を展開する上で区画をなしているとは言い難い。ヘラ切平行沈線文が施された土器の施文順序に注目すると、横→縦→斜位の順となっている破片をはじめ、渦巻文様以外の箇所をヘラ切平行沈線で充填する意識が強く、区画の意図を感じにくいからである。胴部径からしても推測の域を出ないが、下部文様構造としては大渦巻文を配した後に密に直線と曲線を充填するタイプに属するものであり、胴部が主文様となると考えられる。

以上の観察を踏まえると、出野尾洞穴遺跡出土例は図3のような文様構成をとる個体に復元される。口頸部と胴部のバランスから判断して、胴部の文様帯は1帯構成と推察される。時期としては、へ

ラ切平行沈線文・削り取り手法による施文から、前期末葉の十三菩提式に属すると考えられ、本稿で詳述する中段階前半にあたと考えられる。

ただし、口縁部の単沈線による渦巻文様は十三菩提式の系統とは考えにくく、幅の狭い口縁部文様帯に横展開の渦巻文様を表象する東北の大木6式を思わせる。他方、沈線に沿う鋸歯文は大木式由来とは捉え難く、十三菩提式か東関東で影響を受け変容した施文を惹起させるものである。この異なる技法で渦巻文様を表象することが、出野尾洞穴遺跡の特異性を示すものであり、また異系統の接触により製作されることを特徴付けるものである。千葉県内における例としては、市川市東山王貝塚の確認調査で出土した土器がある（図8：植月・松田2000）。報告では五領ヶ台I式とされているが、球胴形の器形と渦巻文様から、出野尾洞穴遺跡出土土器と同様に、大木6式の影響を受けた前期末葉の土器と考えられる。沈線には三角印刻文が沿っており、渦巻文様内には丸棒条工具の浅い円文が施文されている。

また、2層直下から出土した折り返し口縁をもつ結節縄紋を施した土器3点は同一個体と考えられ、図3-1に示した復元土器と伴出した。出土した層上の問題はあつたものの、諸々の点から洞穴の利用は短期間であつたと考えられるので、両者はごく近い時期のものと思ふして差し障りないであらう。



(S=1/6)

図4 東山王貝塚出土土器

4. 前期末葉の地域性

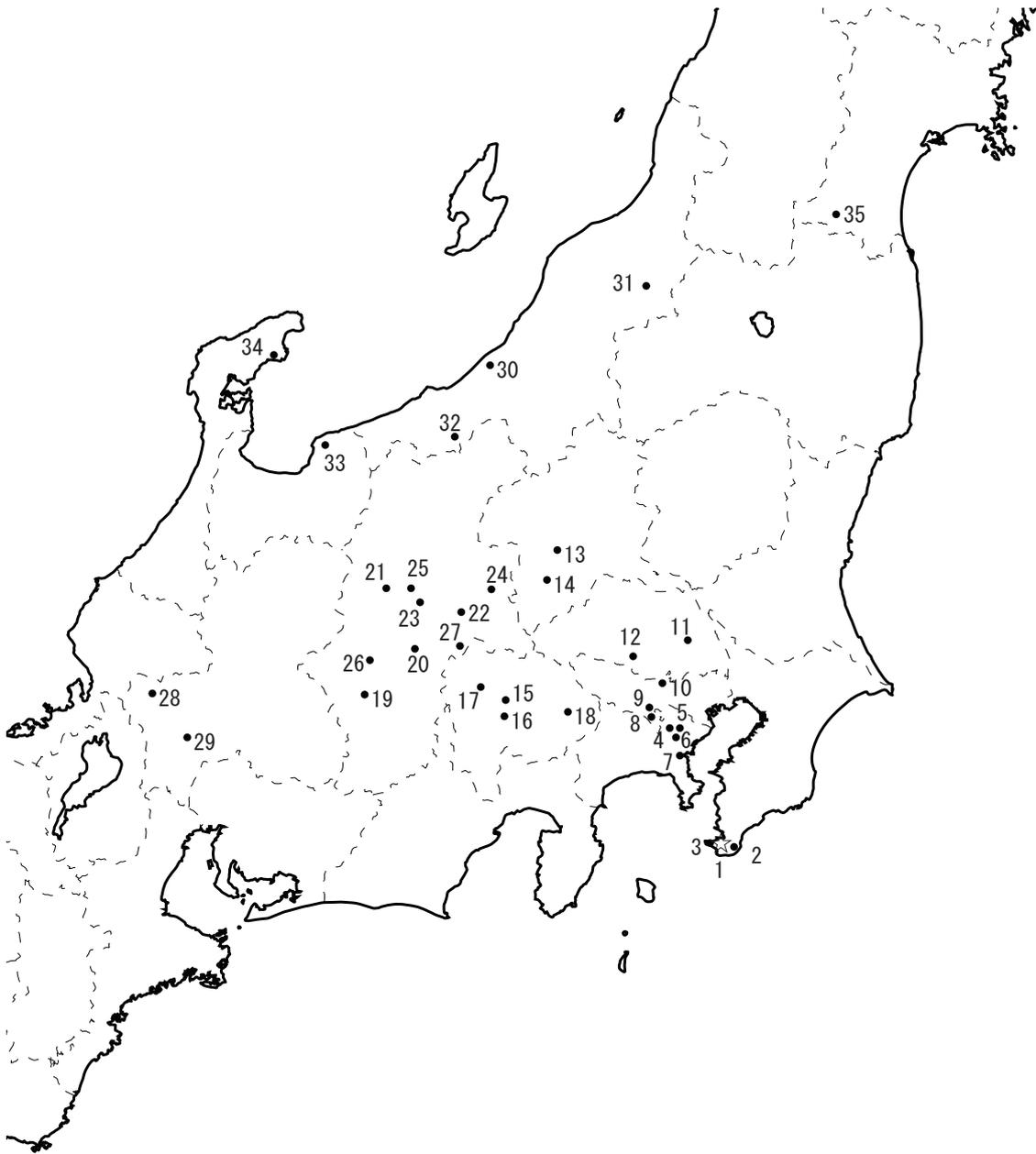
さて、出野尾洞穴遺跡における前期末葉土器の復原を踏まえて、次に土器の出自・系統について検討してみたい。この土器は前期末葉に帰属すると考えられる一方、東関東の土器としてはいささか異質な存在である。その由来・故地は何処に求められようか。また、それと伴出した折り返し口縁の縄紋施文土器を如何に捉えるべきであらうか。

そこで前期末葉から中期初頭の土器型式について広域的な視点から整理しておきたい。前期末葉の研究史に関しては、関東は細田勝（細田1996）、中部地方は長崎元廣（長崎1997・98）などが参考になる。中期初頭の五領ヶ台式に関しては、必要な場合にのみ触れる。

関東における前期末葉の土器型式は諸磯c式と十三菩提式が該当し、このうち末葉後半の十三菩提式は甲野勇によって関東における一型式として注目されたのを嚆矢とする（甲野1932）。この新型式は八幡一郎によって十三菩提式の名称が与えられたが（八幡1934）、その実態は不明な点が多かつた。その後、山内博士により前期末葉の土器とされ、編年上の位置が確定した（山内1937）。

ただし、当時の型式設定は復元できる個体に恵まれず、全体の文様構成を把握して型式設定されたとは言い難く、十三菩提式の施文技法のみが抽出され、内容が拡大した。こうした十三菩提式を問題視した麻生優は、単純な文様構成をもったグループのみで型式が構成されていない実態を提起した（麻生1954）。多系統を背景とする広義の十三菩提式は、まさに諸磯c式以後、五領ヶ台式以前の土器群を指すに過ぎず、麻生の指摘は多系統性を指摘する一方、地域性の混乱を象徴するものであつた。こうした背景には、1950年代の段階まで関東の縄紋前期を概観した吉田格が十三菩提式の分布を南関東にわずかに分布するのみ（吉田1954）、とされた出土事例が僅少な状況があり、実態が不明なまま位置づけのみが定まっていたのである。

その後、十三菩提式の型式変遷の大きな画期となつたのは、1974年に報告されたとけばら遺跡報告で、前期末葉の変遷過程を整理した今村啓爾の論考である（今村1974）。十三菩提式の4細分案



千葉県		群馬県		26	水無神社付近遺跡
1	出野尾洞穴遺跡	13	白倉下原遺跡	27	籠畑遺跡
2	大溝遺跡	14	内匠諏訪前遺跡	28	扇平遺跡
3	鉦切洞窟	山梨県		岐阜県	
神奈川県		15	上野原遺跡	28	上原Ⅱ遺跡
4	花見山遺跡	16	上ノ平遺跡	29	御望遺跡
5	北川貝塚	17	北後田遺跡	新潟県	
6	桜並遺跡	18	美通遺跡	30	鍋屋町遺跡
7	室ノ木遺跡	長野県		31	上野東遺跡
東京都		19	万場遺跡	32	小重遺跡
8	多摩 ニュータウン NO. 769	20	上の林遺跡	富山県	
9	小山田 No. 13 遺跡	21	名籠遺跡	33	柳田遺跡
10	多聞寺前遺跡	22	鴨田遺跡	石川県	
埼玉県		23	大洞遺跡	34	真脇遺跡
11	鎌倉公園遺跡	24	栗毛坂遺跡群	宮城県	
12	八木遺跡	25	白神場遺跡	35	小梁川遺跡

図5 本稿における前期末葉の遺跡

を示し、それまで諸磯c式と十三菩提式のスムーズな変遷を示す第1期の時期を含め、十三菩提式とすることが提示され、十三菩提式と北陸鍋屋町式との近似性を指摘するなど、系統について新たな流れを示唆するものであったが、大勢に受け入れられたとは言い難い状況であった。

十三菩提式の問題点として、型式設定当初から零細な資料からの設定であり、その後も諸磯c式以降、中期初頭の五領ヶ台式以前までを包括していた点が指摘される。十三菩提式の文様描出は、諸磯c式と同じく集合沈線や結節浮線文が用いられているが、新たに沈刻や削り取りなどの手法が加えられることが特徴的である。先行する諸磯c式の細分が時期差か、それとも地域差かで意見が対立していることもあり、続く十三菩提式も同様に地域差の問題を抱えている。近年の細別動向を見ると、1990年代では細田勝（細田1996）、金子直行（金子1999）らの2細分論による多系統の共存と、細

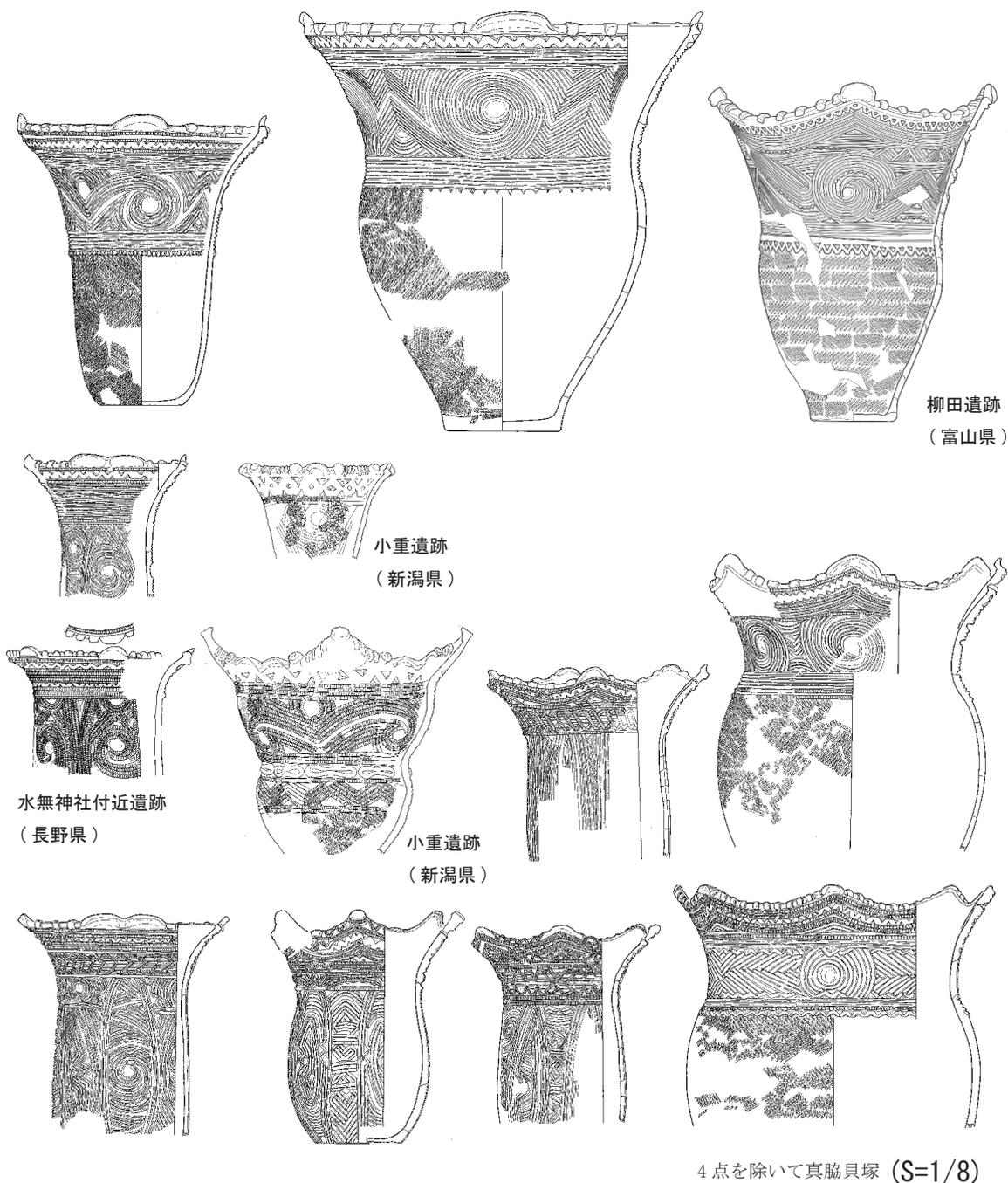


図6 北陸の様相

分を突き進める今村啓爾の5段階、もしくは変遷がスムーズで細分しがたい中段階の細分を含めた7段階以上の細分がある（今村 2001）とする5細分論の段階的系統把握とに分かれ、細別階梯に隔たりが大きい。一型式の年代幅をどのように捉えるかという問題もあるが、金子直行は、前期末土器群を系統別に類別する中で、いくつかの系統要素を持ち合わせた中間的な様相が多く見受けられることを指摘（金子 1999）し、複雑に絡み合った様相を模式図化した。細別段階が少ないために多系統の交流が短期間に劇的な変化を起こしたようにもみえ、理解をより複雑化したかにも感じられる。

縄紋時代の前期末葉～中期初頭にかけては、現在でも大別境界をめぐって問題があり、各地域の研究者間での認識の差異が大きい。その一方で、出土層位による把握、また共伴関係から導き出されたとは言い難い実態から、決着の着かない問題となっている。この背景には、前期末葉～中期初頭にかけて遺跡数が減少すること、良好な層位資料に恵まれていないことなどがあり、特に房総半島における遺跡数の激減は著しく、従来、東関東では土器型式の空白域と捉えられていた状況がある。縄の問題について触れた山内博士が「前期末にも出現するが、型式の設定がよく出来て居ない」（山内 1979）という発言の状況は現在も当てはまっており、未だ前期末～中期初頭という不明の土器群を一括する状況が如実に示しているといえよう。

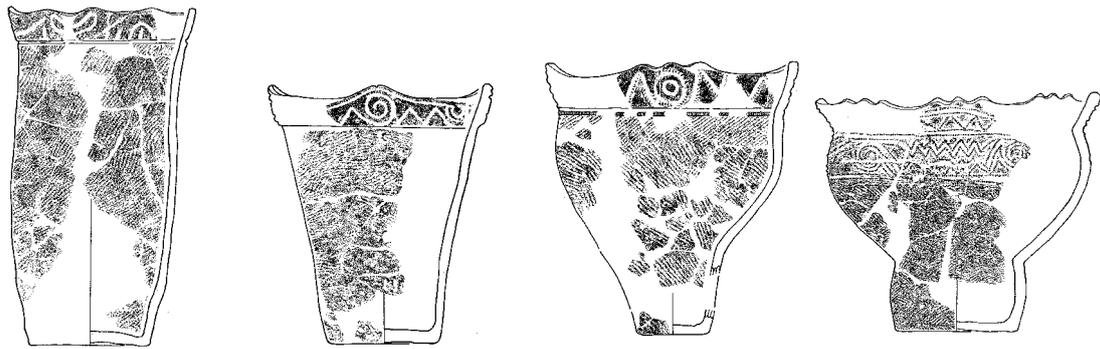
ここで、中部の動向についても触れておきたい。中部の該期土器型式は研究史をみるに型式名の乱立期があり、かなり煩雑である。長崎元廣が「諏訪湖編年」（長崎 1997）と指摘する、踊場式（藤森 1934）、晴ヶ峯式（戸沢 1951）に始まる一連の前期末葉～中期初頭の動向は、型式内容の拡大縮小を繰り返す結果となった。これらに加え、桜沢式（鈴木 1957）、籠畑式（武藤 1968）の提唱など、一地域に多数の型式名称が混濁している様相が伺えよう。しかも、研究者間の認識に加え、内容の修正を繰り返したことで型式名による内容の違いがあり、報告書の指標が難解なものとなり理解し難い。中部地方の型式は地方型式として発展した経緯は、近隣地域との比較を困難にし、広域編年を阻害する要因となっている。一方で、関東における十三菩提式の実態も判然とせず、双方の対比に両者が障害となっていた点は否めない。

1970年代から中部地方では中央道建設に関連して発掘が進み、該期の資料が増加した。特に、扇平遺跡では前期末葉の遺構が数多く検出され、中部における編年上の要となっている（会田 1974）。その後も長野を中心に該期の資料は増加したが、研究者間の型式名称、その内容の相違は解消されないうままであった。近年で中部をまとめたものとしては赤塩・三上が再整理した晴ヶ峯式（赤塩・三上 1994）があるが、こちらも共通の認識となっていないように思われる。

前期末葉において、関東・中部の入り組んだ多系統性がみられる状況で、北陸からの影響を見過ごすことは出来ない。中部における渦巻文様の影響は、北陸からの影響なしで成立するとは考えにくい。中部の渦巻文様も諸磯c式から連なる基本モチーフであるが、口縁部文様帯に幅の広い渦巻文様を配し、渦巻文様自体を連結するのは鍋屋町式の大きな特徴である。鍋屋町式を中心とする北陸の土器様相については、山口明の研究（山口 1980・84）が詳しい。

鍋屋町式の最も新しい段階については、石川県真脇貝塚に豊富な資料があるが、石川県・富山県ではとりわけ福浦上層式として認識されており、細分案が示されている（加藤 1997）。鍋屋町式の新しい段階と極めて近似した内容となっており、新潟の鍋屋町遺跡から石川県真脇貝塚までの北陸の地域性を考えるうえで異論はあろうが、ひとまず鍋屋町式としての括りで論を展開したい。

山口によれば、北陸から渦巻文を中心配置する文様構造をもつ土器は中部地方に南下する（山口 1980）。北陸の渦巻文様は、中部を越えて関東をも席卷するが、文様の変化が漸次的な変化か、それとも段階的なものかは難しい。長野県下にも鍋屋町式そのものと考えられるような搬入土器が見られる。搬入土器のみでは影響を受けた傍証とはならないが、土器型式が閉ざされた地域で純粹に発展す



(S=1/8)

図7 新潟県北部 上野東遺跡の大木6式

ると考えるほうが無理がある。

一方、北陸も独自に発展するわけではなく新潟県小重遺跡例のような主文様帯が多帯化し横帯にジグザク状に施文された関東・中部の影響を考慮しなければならない文様構造をもったものもある。

また大木6式古段階が出土した新潟県上野東遺跡があり、北陸もまた中部のみならず、東北の影響を受ける地域であることを忘れてはならない。図示した土器も、口縁部の幅狭な文様帯に渦巻文と沈線を配する点は大木6式に共通する要素だが、大木6式そのものとは言い難い(図7)。相互の影響を細やかにみていく必要がある。一地域のみで示した序列では地域間での比較が難しい。他地域からの影響を受ける文化変容は絶えず起こるものであり、特に前期末葉の系統性は煩雑だが、指標が系統間で共有されているものもあり、細かく弁別したほうが理解しやすい。

縄文土器大観の中で小島俊彰は、北陸～関東までの該期土器群を十三菩提式土器様式として概観している(小島1989)。このなかで、系統間として桜沢系・鍋屋町系・扇平系・十三菩提系・朝日下層系の系統の地域性・序列を示したが、実際には異系統の接触によるものも多く見受けられ、系統間の関係性が理解しづらい。

5. 出野尾洞穴遺跡出土土器の系統

現在までの前期末葉～中期初頭にかけての編年とその広域対比の混乱は、言葉を換えれば、現在の地域区分ごとに終始した地方型式による編年の問題ということになる。つまり、系統性の欠如ということに集約される。地域内で発展する土器型式は、他の影響を受けず純粹に変化するということは考えにくい。土器の変化は弛まぬ人の移動に呼応して、新しい規範・技術によって変化するのであり、ただ省力という現象のみでは説明できない。ただし、一方的に変化するのではなく相互に呼応する場合もあり、土器から読みとれる細かな差異や変化が時期的なものか、地域的なものか、という点の見極めが重要である。これは当該地方の編年を精緻化する一方、広域的な視座から地域間の関係性を相互検討していく作業が求められよう。

さて、前期末葉から中期初頭の研究史を整理したところで、出野尾洞穴出土土器の系統性を検討したい。この土器は文様構成・器形などを考慮すると、どうやら広域的に分布しながらも、その中心は北陸に端を発し、中部で変容した系統に属すると考えられる。胴部が張り出さず、朝顔形に開く器形は、中部を中心に分布する扇平タイプや扇平類型として理解される土器に近似する(小島1989)。胴部にヘラ切平行沈線や平行沈線文などで渦巻文様を描くが、口縁部の押圧隆帯文を特徴とする系統に属

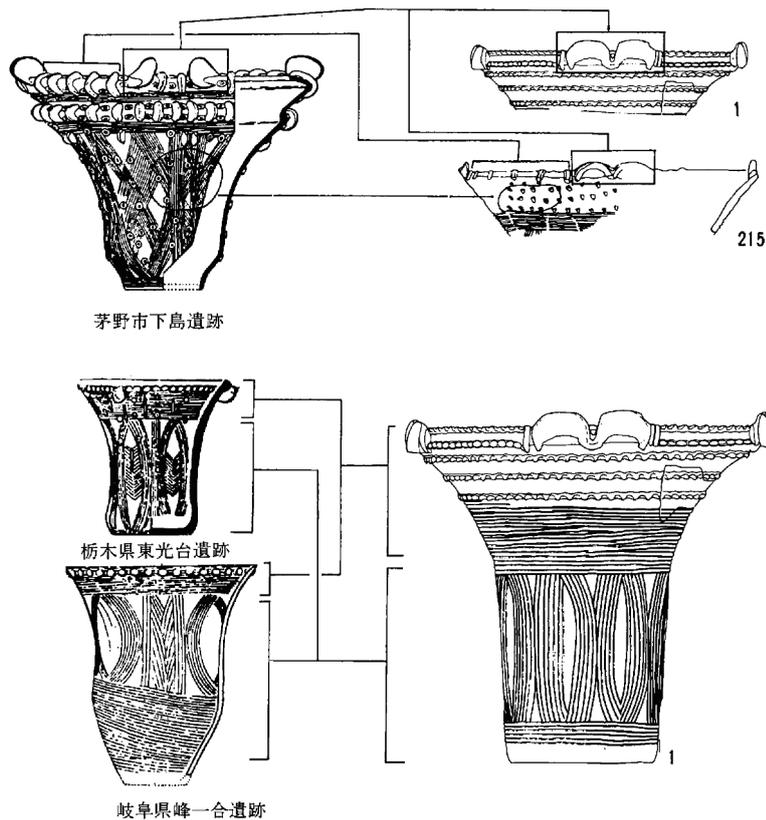


図8 三上の変遷案

するものである。しかし、口頸部の文様帯に関して中部の土器型式と同系統、または影響下にあるならば、口頸部の幅狭な文様帯に粘土紐に凹凸をつけた押圧隆帯文が施されるはずであるが、出野尾貝塚出土例は地文を持たずに沈線で連結渦巻文が施文されている。この点に留意すると、東関東の独自性を考えるべきであろうが、東関東にはこうした類例はなく、千葉県内で散見する大木6式の影響を見るほうが妥当であり、ここに異なる系統を見ることが出来る。

一方、耳状突起の出自は何処に求められようか。大洞遺跡の調査を行った三上徹也は中部高地の前期末葉～中期初頭の考察から、図8のような変遷を想定した(三上1987)。十三菩提式の変遷を論じた今村啓爾が既に批判しているように(今村2001)、図示された下島遺跡の諸磯c式は諸磯c式古段階であり、続く十三菩提式中段階への変遷を示したにしては型式学上の間隙が大きい。しかもこの耳状突起は、中部で発生したというよりも、石川県真脇貝塚の良好な資料をはじめとする北陸から中部に伝わった系譜と、東北地方の前期大木式の系譜とがある。広域に分布するこの突起のみでは、どちらの影響か判断しにくい³⁾。

では十三菩提式の変遷を細かく見た場合、どのような序列となるだろうか。そこで、鍋屋町系統から連なる系統の土器を中部から関東まで集成した(図10～図12参照)。本稿では出野尾洞穴遺跡出土土器の位置づけを重視し、ひとまず現行編年における位置を見定めてみる。鍋屋町式の細分・対比については、既に山口明、今村啓爾により細分案が示されている(山口1980、今村2001)。十三菩提式の細分案は今村の現行編年を参考とし、古・中・新段階に区分した。本稿では出野尾洞穴遺跡の前後となる古段階、中段階に限って図示し、各段階を前半・後半に細分した。中段階はその指標が系統間で煩雑に交差するため難しく、関西・東北地方との対比をするとさらに細分可能と考えられるが、ひ

とまず2段階に区分している。以下、地域を中部と関東を地域ごとに示す。

十三菩提式の段階区分としては、大まかに以下のような指標をもって編年した。前段階の諸磯c式との違いは、前述した削り取り手法の確立を指標にすることが出来る。施文技法としては、結節浮線文から結節沈線へ、そしてヘラ切平行沈線文・平行沈線文へと変化する(今村2001)が、中段階でも古手の施文技法を用いる場合がある。施文技法の変化は大まかな方向性としては理解されるが、細別においては明確な指標となりにくい。

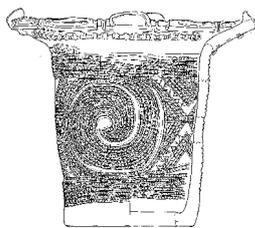
十三菩提式の前段階は、諸磯c式の伝統を色濃く残す系統と、北陸地方の影響を受けた土器の二者の時期がある。北陸地方の影響を受けた土器では、主文様は横位に展開する渦巻文を中心とし、文様を連結・開放した空白部は同種の施文で充填する。口縁部には三角印刻文が施文される。上下の三角印刻文に囲まれた空白部に三角印刻文や刺突文を付加するものがあり、古段階後半になると鋸歯状文・三角印刻文が主文様となる渦巻文様へと貫入する。ただし、この貫入は流動的で中段階前半にもあり、指標とはなりにくい。胴下半部は縄紋施文である。

十三菩提式の中段階では西日本の搬入土器が増え、北白川下層式の影響を受け始める。口縁部の三角印刻文は刺突列に変わる。鋸歯状文を残すものもあるが、古段階のように上下に施文するのではなく、どちらか一方の鋸歯状文として残っている。中段階前半には口頸部の主文様の渦巻モチーフが幅広い胴部に移行する。集合沈線文によるレンズ状・鋸歯状モチーフが諸磯c式の系譜を引くのに対し、直線と曲線の組み合わせで集合沈線間を円文・半円文が埋める系統は鍋屋町式の系譜を色濃く残している。また、鍋屋町式が波状縁と平縁の二種の器形を有するのに対し、十三菩提式で鍋屋町の影響を受けた一群は基本的に平縁が主流のようである。

地域ごとの変遷をみてみよう。岐阜・長野・山梨県の中部地方では、古段階前半には松本市白神場遺跡に良好な資料がある。三角印刻文と渦巻文で施文されるが、鍋屋町式との大きな違いは文様帯の多段化である(今村2001)。

古段階後半例は、籠畑遺跡が挙げられる。10号住居から出土した2点の土器は、主文様となる渦巻文様への三角印刻文の貫入が認められる。羽状縄紋が施文され、鍋屋町式の影響が強い土器といえる。古段階では破片資料が多く完形のもの少なく資料数の不足を感じるかもしれないが、古段階では依然として諸磯c式からの系統が強く残っており、両者が併存する時期である。

中段階前半の中部地方には、諸磯c式のレンズ状の伝統を横位に展開する十三菩提式古段階の系統を受け継ぐものと、鍋屋町式の影響を受けて変化した系統がある。ただし、諸磯c式系統については、前段階をそのまま受け継いでいるものはほとんどなく、鍋屋町式・北白川下層式系統の影響は少なからずある。大洞遺跡・万場遺跡は、胴部のヘラ切平行沈線にその名残があるが、変容は著しく、口縁部文様帯は北陸の影響が強い。扇平系の典型とされる大洞遺跡例だが、むしろ、異系統の組み合わせによるものと捉えたほうが理解しやすい。栗毛坂遺跡群A区から出土した耳状突起は楕円形を



(S=1/8)

図9 小梁川遺跡出土土器

なしており、中部の独自の文様といえる(宇賀神1991)。「晴ヶ峰式」と石川県真脇貝塚の「福浦上層式」の接触、あるいは影響下から生まれたものと考察され、赤塩・三上には異系統と捉えられている土器である(赤潮・三上1994)。山梨県美通遺跡の例は、口縁直下の対向する鋸歯文の間は円形印刻となっており、中段階前半でも古手の様相だが、主文様の渦巻を中心から文様帯を2段に分割し、栗毛坂遺跡例に近い。渦巻文様を主としながら、文様帯内を分割する構造は鍋屋町式には見られなく、中部地方で成立したものと見える。古段階の多段構成が影響しているのだろう。この段構成を有する土器は、宮城県

小梁川遺跡の土器にも同種の文様構成をもつものがある（図9）。影響を受けたというよりは、搬入品の可能性が高いが、その場合どのようなルートを通ったのか興味深いところである。

また三角印刻文は、中段階には変化して刺突列となる。栗毛坂遺跡群 A 区、水無神社附近遺跡、大洞遺跡の口縁部に見られ、美通遺跡のようにまだ上下の三角印刻文を残し、中央のみが刺突のものもあるが、中段階でも古手の様相を示すのであろう。中段階前半とした鴨田遺跡の土器は、耳状突起と扁平なりボン状突起を装飾帯に施し、口縁下には鋸歯状文をもち平行沈線で文様帯を区切り、主文様に渦巻文が配される（百瀬・功刀 1992）。文様は中段階に近く、中段階の目安となる縦の区画観を強めているが、鋸歯状文間に三角印刻文をもつことと、主文様帯から中段階前半に含めた。

中段階後半には胴部の縦区画が明瞭となり、口唇部の装飾帯、口縁部の押圧隆帯文が指標となる。器形としては朝顔形に強く開くものから、やや緩やかな開きになるものへと変遷する傾向がある。胎土に関しては、山梨県上野原遺跡の土器に金雲母が含まれていることが特筆される。

北後田遺跡から出土した土器で注目すべきは、見込み 4 箇所につけられる装飾帯のリボン状突起と、縦区画と押圧隆帯文下に貫入したジグザグ状の沈線である。装飾帯に関しては、水無神社附近遺跡の土器にもリボン状の突起はあるが、この突起が栗毛坂遺跡の楕円状突起が崩れたものとするか、東北地方の大木式に見られる隆帯のものとするかは判断が難しい。

中部地方における中段階の装飾帯は耳状・円形などの周囲を貼付文で加飾する傾向がある。中部では、渦巻・耳状・円形突起を一個体に複数貼付していたが、関東では選択的になり、二もしくは四単位にいずれかの突起が貼り付けされる傾向が強い。中段階後半になると、北後田遺跡のように突起を強調した装飾帯になるものが多く、これは単位を強く意識する関東に多く見受けられるものである。装飾帯に関しては、籠畑遺跡例のソーメン状貼付文を加えるものはより新相といえる。

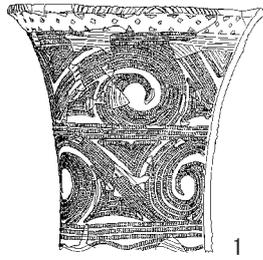
岐阜県上原遺跡出土土器は、中部高地で発達した土器とみなされている（掘田・鈴木ほか 2000）が、装飾帯は半円・渦巻・リボンと多岐にわたる装飾で、異系統の要素が凝縮したようなものとなっている。胴部の文様も縦区画は幅狭く、鍋屋町式の新しい段階の様相をなしているが、縦区画を多段に分割した中は渦巻文様以外の沈線・印刻の文様で関東的なものがみられる。

続き、関東の様相にうつる。関東の古段階前半は、鍋屋町系の良好な資料は見あたらなく、諸磯 c 式系統の十三菩提式が中心となる時期である。古段階後半になり、八木遺跡例があるが遺跡数は少ない。中部より諸磯 c 式系の十三菩提式が強く影響しているのだろう。

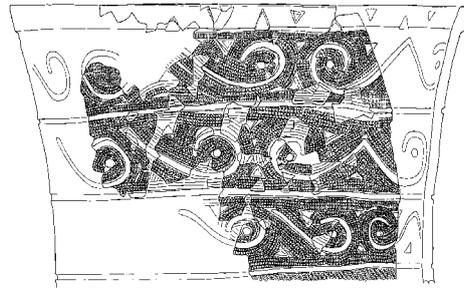
中部の中段階との相違は、装飾帯における選択である。先述したように中部では装飾帯に複数の系統の突起を貼付していたが、関東では選択的になり、二もしくは四単位にいずれかの突起が貼り付けされる傾向が強い。白倉下原遺跡の遺構外から出土した土器は三角印刻文を口縁直下に施文するが、形がくずれて刺突文に近くなっている。古段階後半に近い特徴だが、集合沈線文による渦巻を描いており、中段階前半とした。耳状突起が付された位置と器形からすると、突起が装飾帯の 6 箇所に配されるのかもしれない。多門寺前遺跡から出土した土器は、口縁の鋸歯文上位に沈線の文様が描かれるが、残念ながら遺存状態が悪く、何が描かれているかは不明瞭である。胴部には集合沈線で施文され、胎土に若干の金雲母を含むとある。埼玉県鎌倉公園遺跡の土器も金雲母を含んでおり、山梨県上野原遺跡と同様に、今後の胎土分析を踏まえて注目される。内匠諏訪前遺跡出土例のように 2 段構成の胴部文様をもつ土器は、中部の影響を色濃く受けているのかもしれない。

関東の中段階後半も縦区画が指標の一つである。渦巻文が描かれなくなり、平行沈線による直線的な図形が目立つようになる。北川貝塚例のようにリボン状突起を中心に格子目状の貼付をなすものは、中部の籠畑遺跡例と同様に、中段階後半でも新しい要素といえる。

十三菩提式古段階前半



1 白神場遺跡

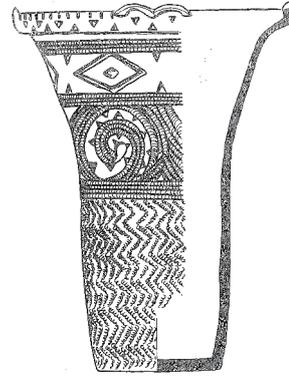


2 白神場遺跡

十三菩提式古段階後半

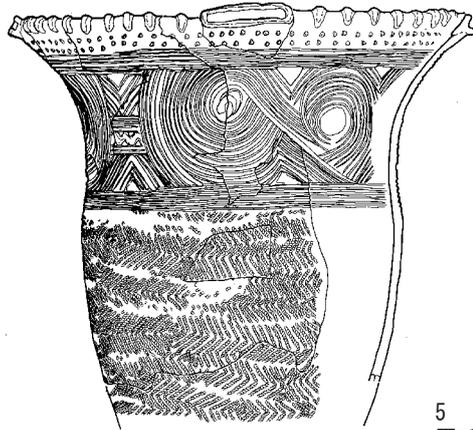


3 籠畑遺跡

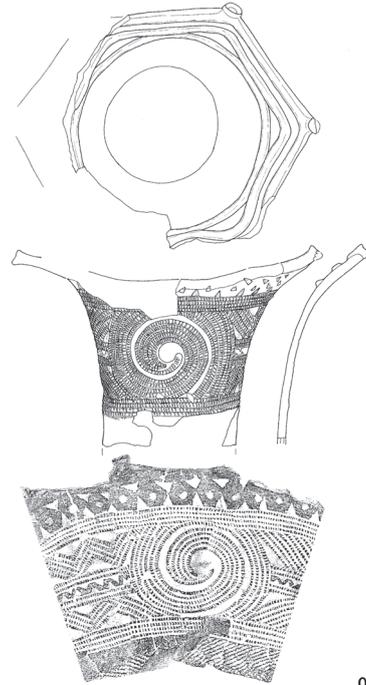


4 籠畑遺跡

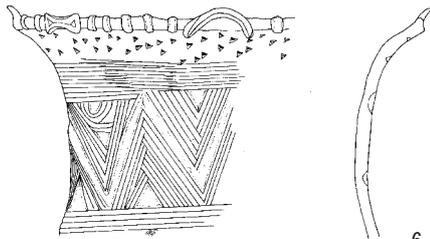
十三菩提式中段階前半



5 栗毛坂 A



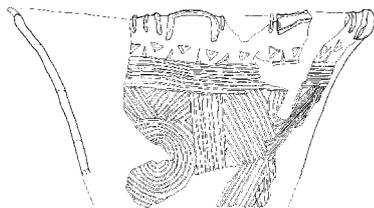
9 美通遺跡



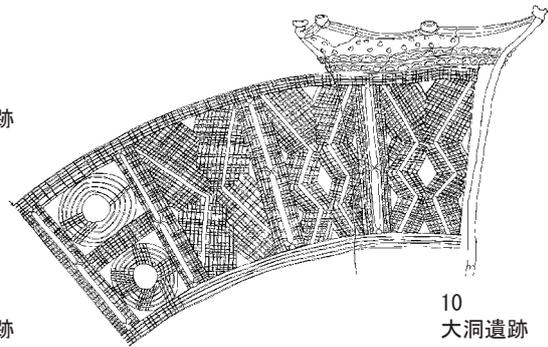
6 水無神社付近遺跡



7 大洞遺跡



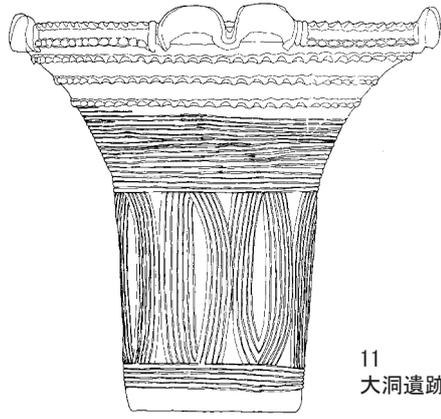
8 鴨田遺跡



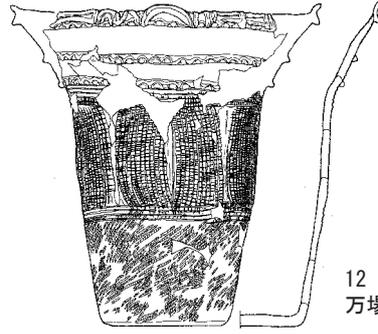
10 大洞遺跡

(S=1/8)

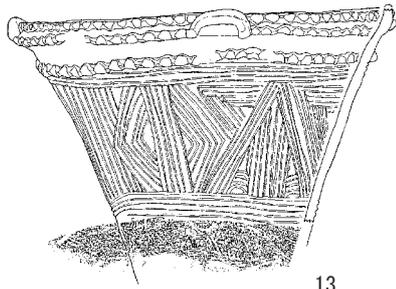
図 10 中部地方の様相 (1)



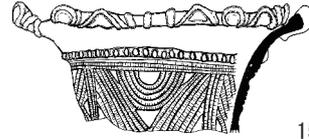
11 大洞遺跡



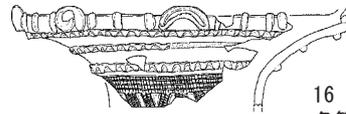
12 万場遺跡



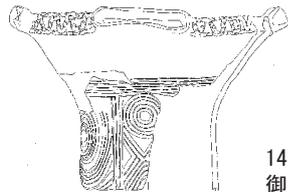
13 上の平遺跡



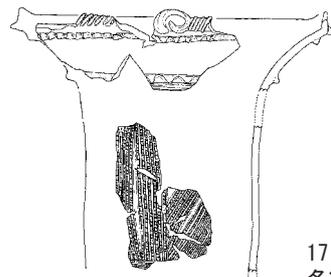
15 上の林遺跡



16 名籠遺跡



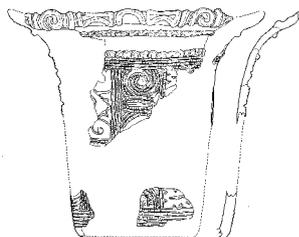
14 御望遺跡



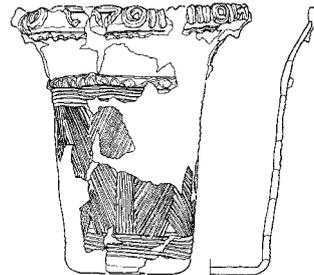
17 名籠遺跡



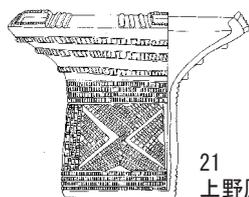
18 北後田遺跡



19 上原II遺跡



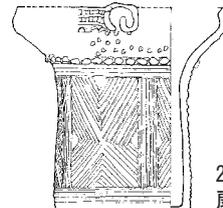
20 万場遺跡



21 上野原遺跡



22 籠畑遺跡

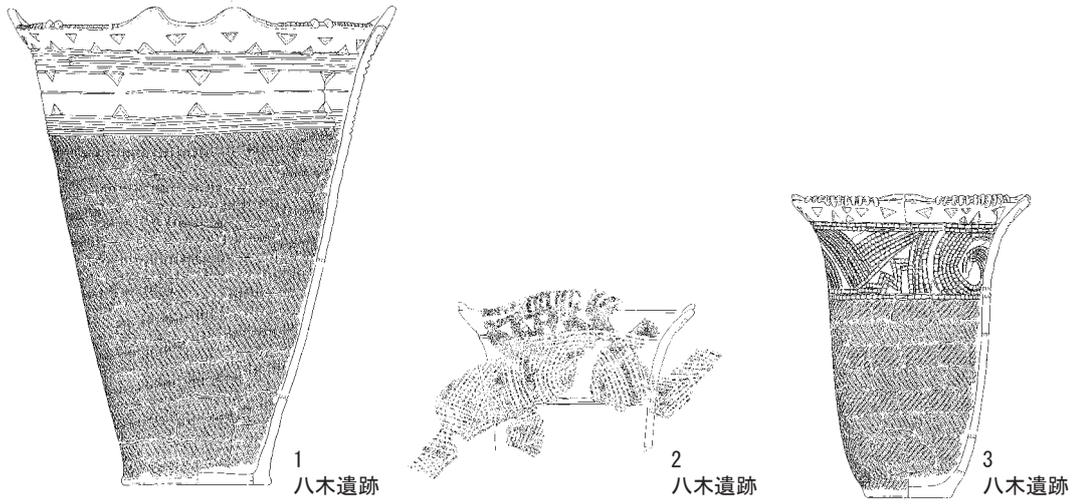


23 扇平遺跡

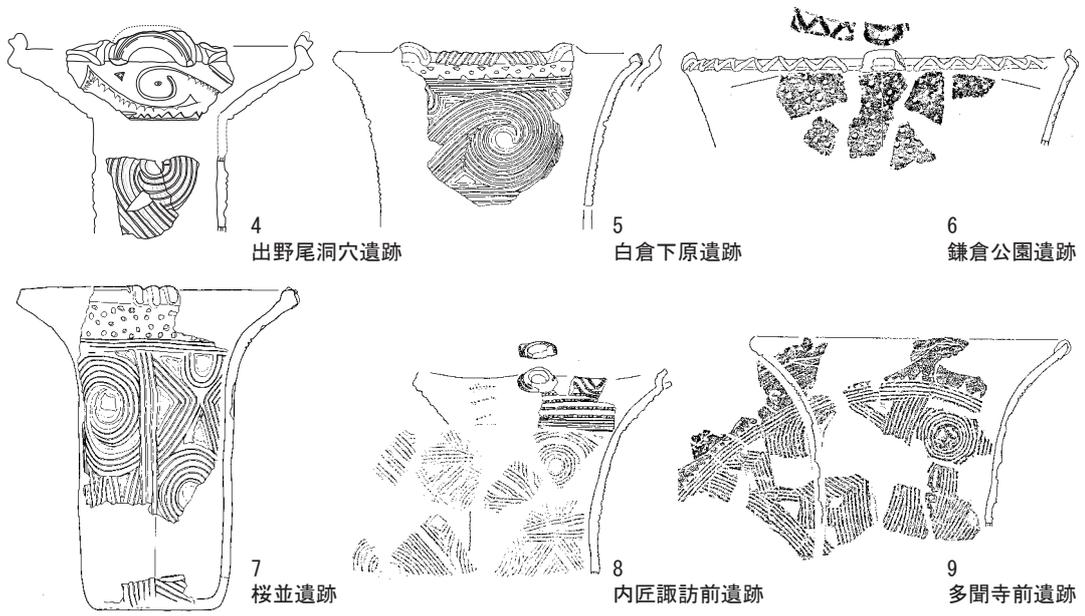
(S=1/8)

図11 中部地方の様相(2)

十三菩提式古段階後半



十三菩提式中段階前半



十三菩提式中段階後半

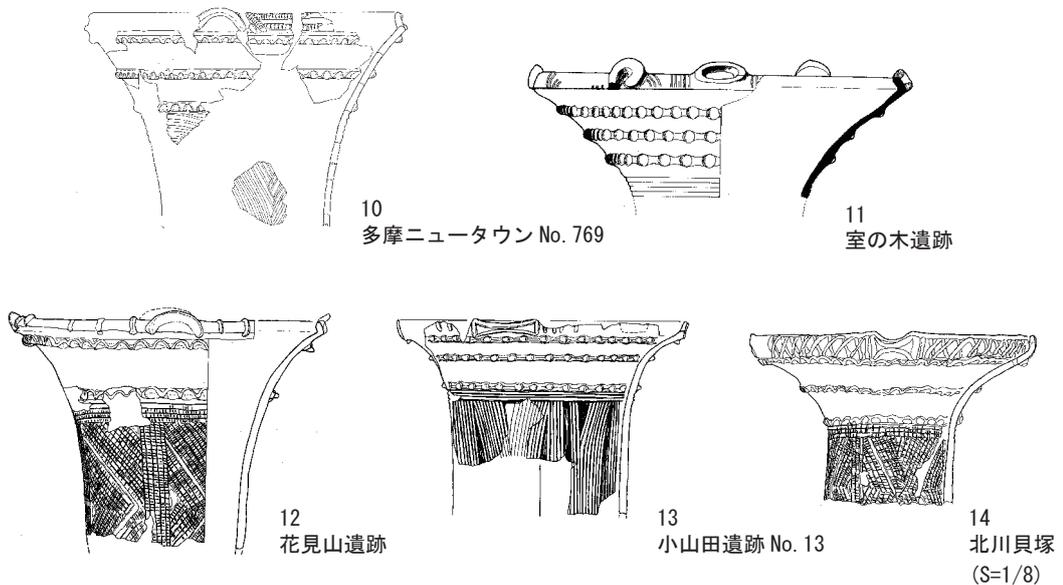


図 12 関東の様相

6. 房総半島南端の様相

ここで視点を戻して、出野尾洞穴遺跡で伴出した東関東に分布する縄紋施文の土器について触れておきたい。西関東を中心に分布する十三菩提式に対して、東関東の前期末葉には貝殻文を主体とした浮島式から続く興津式があたとされている。1950年代から利根川下流域の研究を重ねた西村正衛は、前期末の興津式が出土する層から縄紋の土器が出ることに注意しながらも、その明確な位置づけは行わなかった（西村 1984）。千葉県古和田台遺跡において、和田哲が縄紋施文土器について着目し、多種のヴァリエティに富む縄紋の要素があるが大略一型式に収まるものとして十三菩提式に併行する東関東の土器として注目したが、型式名称の設定は行わなかった（和田 1973）。

また、東関東で長らく実態が不明であった結節縄紋をもつ中期初頭に位置づけられた下小野式の存在も、その編年的位置づけが問題視されていた（江森ほか 1950）。常陸伏見遺跡発掘成果により、下小野式の枠組みを新たに前期末の下小野Ⅰ式、中期初頭の下小野Ⅱ式として仮称した小野真一は、円筒下層 d 式の存在から縄紋施文土器について東北からの南進を指摘している（小野 1980）。下小野式の結節縄紋の施文が「横位→縦位」という変化するという定説は小野の指摘に由来するが⁴⁾、常陸伏見遺跡を中心に論じたものであり、東関東全域の状況を論じたわけではなく、今後の検証を有する観点である。

縄紋のみを施文するという一群の存在は、型式として確定しないながらも前期末葉の位置に置かれてきた経緯があるが、小林謙一が指摘するように、側面圧痕や結節縄紋などの縄を巧みに施文する土器群は東関東の前期末葉を構成する組成の一部に過ぎない（小林 1991）。小林は、東関東の中期初頭として自ら位置づけた八辺貝塚の分析から、下小野式を八辺式に伴う粗製土器として、下小野タイプと捉えている。関東圏の縄紋時代前期後葉の土器群には、諸磯式にも浮島式にも縄の伝統が薄い。地紋としても縄紋はありながらも、縄の撚りなど縄紋に対する施文技巧の工夫に関しては単純な水準にとどまっている。これに対して、東北地方の前期大木式の縄紋はヴァリエティに富む。東関東における全面縄紋施文土器の出現は、内的な発展とは考えにくく、外的な要因を考えるべきであろう。

側面圧痕を有する土器群が、東北地方前期後葉の大木 5 式からの影響を受けている点は、芳賀英一により既に指摘されているが（芳賀 1985）、大木 5 式以後の縄紋施文土器がどのように変遷するかは論証の足りない部分である。これに加え、東関東で隆盛した浮島・興津式の貝殻紋はどのように終局を迎えるのであろうか。貝殻紋の変遷も未だ追求の足りない部分である。

東関東の編年網構築が困難な点は、組成ごとに型式名称が設定されており、前期末～中期初頭の土器として一括して扱われている点にある。さらに前期末葉が未命名の型式 (+) とされる反面、下小野式は中期初頭であるとする不動の位置にある。近年では、今村啓爾が前期末～中期初頭にかけての土器編年案を挙げた（今村 2010）。東関東の粗製土器に関して下小野式を前期末の精製土器（十三菩提式）との伴出関係からこれまでの議論と一線を画した編年網を展開している（今村 2010）⁵⁾。文様に乏しい該期をどのように捉えるのか。また、精製・粗製など組成に関する理解をはじめ他研究者間での見解の相違があり、今後の議論が望まれるところである。

このような観点において、出野尾洞穴遺跡から出土した、本稿で十三菩提式中段階前半とした土器、2層直上から出土した折り返し口縁の土器は伴出関係にあり、近似する時期のものとして注視されるべき内容である。付言すれば、洞穴の利用として、後期前葉の土器を除けば限定された時期の利用が窺え、より上層で出土していた 1954 年調査の土器もほぼ同時期、もしくは後続する資料として考えられる。1954 年調査で復元できるものはないが、貝殻条痕を全面に施文する土器などは、神奈川県室ノ木遺跡などにもあり、組み合わせとしては近い内容となっている。

	北陸	中部高地	西関東	東関東	東北
前期末	蜷ヶ森Ⅱ	諸磯c(古)	諸磯c(古)	興津Ⅱ	大木5a
		諸磯c(新)	諸磯c(新)	粟島台	大木5b
	鍋屋町	十三菩提(古)	十三菩提(古)	粟島台	大木6-1期 大木6-2期
	真脇	十三菩提(中)	十三菩提(中)	下小野	大木6-3期
	朝日下層 新保上安原段階	松原 踊場	十三菩提(新) 十三菩提(新)	下小野 下小野	大木6-4期 大木6-5期
中期中 初頭	新保	踊場	五領ヶ台Ia	五領ヶ台Ia (+下小野)	五領ヶ台I式並行 (大木7a-I)
		踊場	五領ヶ台Ib	五領ヶ台Ib (+下小野)	

図13 今村啓爾による編年案

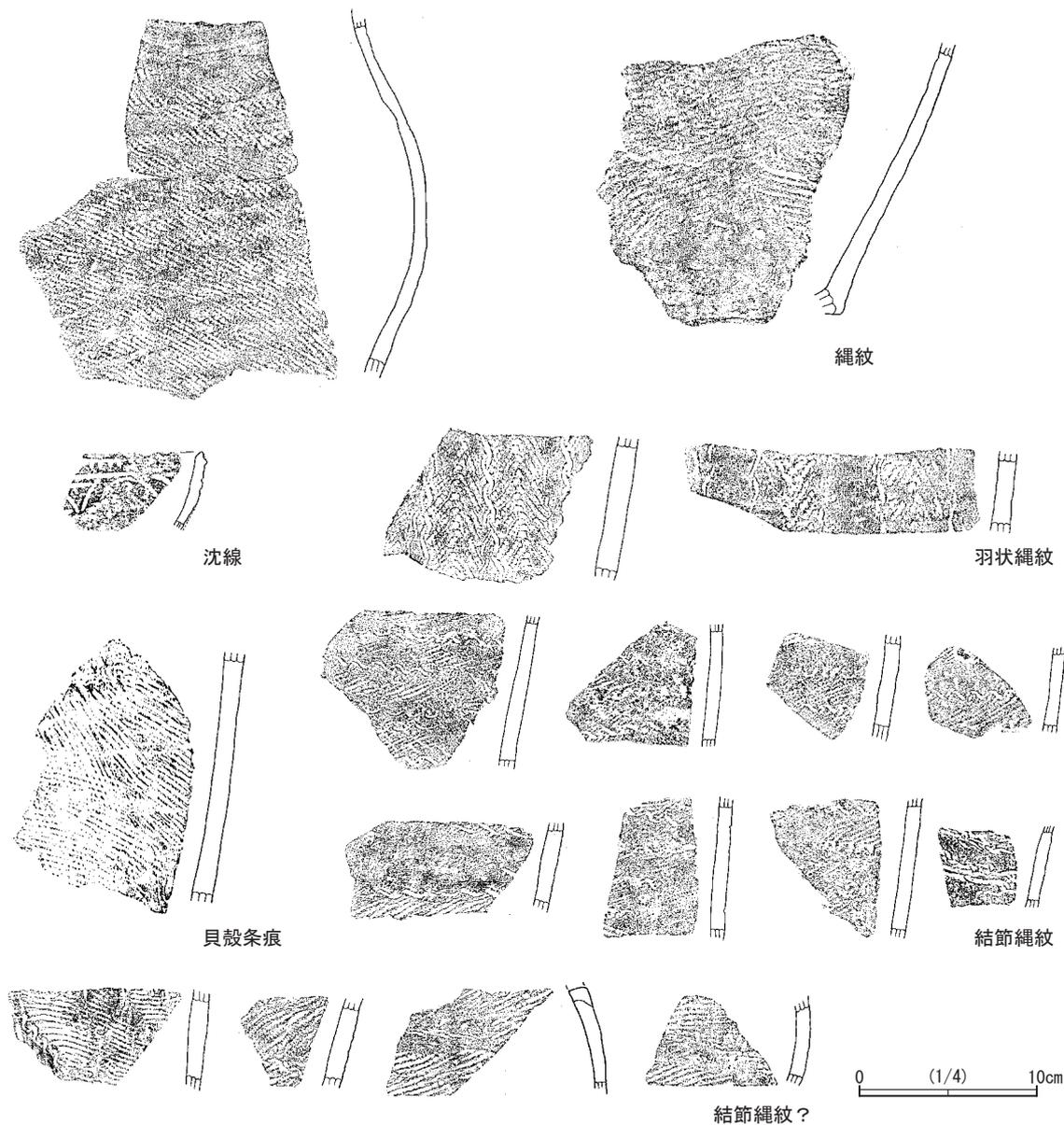


図14 出野尾洞穴出土土器 (1954年調査)

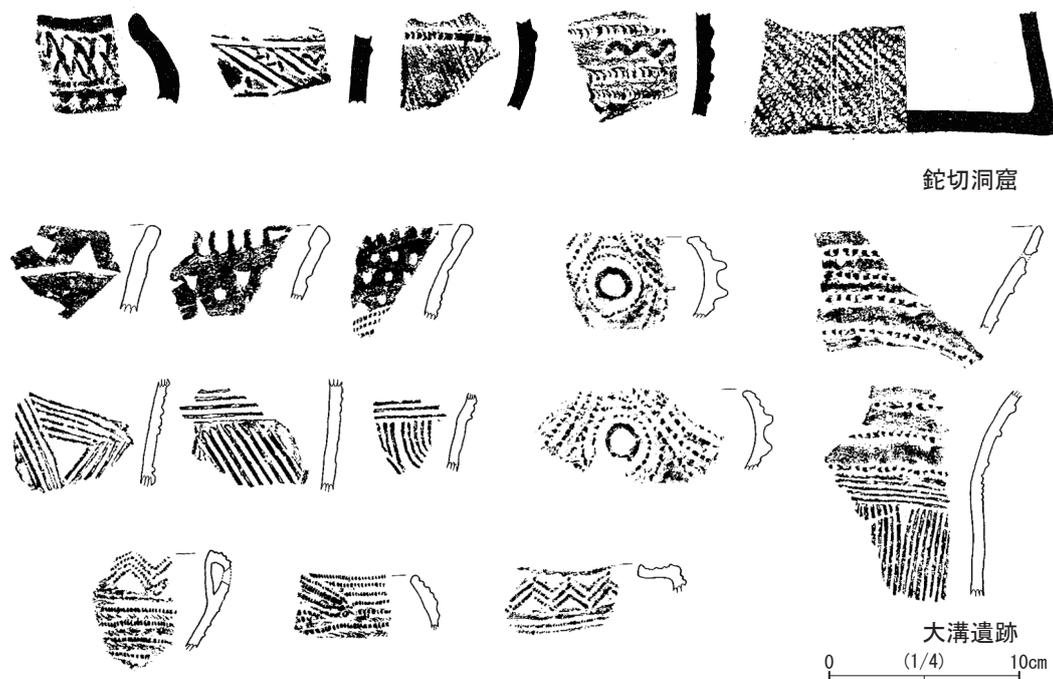


図 15 鉾切洞窟・大溝遺跡 前期末葉の土器

近隣に目を向けると房総半島南端の前期末葉としては寡少であるが、十三菩提式と五領ヶ台式が最下層から出土した鉾切洞窟（金子 1958）、玉口時雄の指導のもと調査報告された千倉町大溝遺跡（小金井 1981）などが挙げられる。いずれも破片資料で全容をうかがい知ることが難しいが、概ね、鉾切洞窟が十三菩提式中段階、大溝遺跡が古段階後半～中段階の資料と考えられる。しかし、地域の変遷を追うには充分とは言えず、房総半島における類例の増加が望まれる。

まとめ

さて、出野尾洞穴遺跡の出土資料が十三菩提式中段階にあたり、多数の系統を併せ持った異系統土器とする根拠は以上の通りであるが、まとめておこう。

- (1) 北陸の鍋屋町式の影響を受けた装飾帯をもつ鍋屋町系の十三菩提式である
- (2) 北陸鍋屋町式の影響を背景とする扇平系に代表されるが、さらに別系統を含む
- (3) 金雲母を含む胎土から、北陸からの搬入品とは考えにくい
- (4) 一方、口縁部文様帯の沈線による渦巻文は東北地方大木 6 式の影響を受ける
- (5) 三角印刻文と渦巻文様の配置は中部の影響と考えられる

少なくとも三系統以上の影響を受けて成立した出野尾洞穴の土器が、伴出した資料も含めて東関東における前期末葉の変遷を論じるうえで一つの標識となり、重要資料であることは疑いようがない。金雲母を含む土器は中期初頭の五領ヶ台式にも時折見られるが、十三菩提式に少なからず観察される。胎土分析も視野に入れて、地域的特色なのかを見定めなければなるまい。

再三にわたって述べてきたように、十三菩提式を含め、前期末葉の土器型式混乱の背景には、地方型式の乱立がある。多系統性の理解なくしては一地方に多数の土器型式が併存したことになり、望まざとも一細別内に多くの系統を内包することとなり、結果として細別を踏みとどまらせるものとなる。

本稿では出野尾洞穴遺跡の出自の考察を目標にしたため、小細別のレベルに近い弁別を行い、十三菩提式の一系統の序列を示したに過ぎない。特に西日本を中心とする北白川下層・大歳山系統の土器

群との変容を考えると、押圧隆帯文を中心とする十三菩提式中段階の変容を捉えるべきであったかもしれない。

現代における我々の認識の問題もあろうが、地形などを考慮し、歴史的な地域区分が型式の前提にあるかのように錯覚するが、実際には、野を越え山を越え、海をも越えて搬入される土器がある。出野尾洞穴遺跡の異系統土器は東関東では例がなく、東京湾を越えて運ばれたものとする興味深い、その場合、口縁部にみられる東北地方の影響はどのルートで伝わってくるかが問題である。東関東における大木式の影響を視野に入れて望まねばなるまい。今後の課題は山積みである。

謝辞

本報告前ではあるが、復元模式図の作成にあたっては岡本東三先生の許諾を受け、研究室が概報製作で忙しい12月に実施した。相も変わらず遅筆なせいで柳澤清一先生にご指導いただきながらもご迷惑をおかけした。東北地方からの影響については長山明弘氏よりご教示いただいた。また文献収集にあたって、小林嵩、松嶋沙奈、近江美和の各氏にご協力いただいた。記して感謝申し上げたい。

註

- 1) 1981年国書刊行会により刊行された館山市史は、館山市編纂委員会により1971-1973年に刊行された館山市史の誤植を訂正し合本複製したものである。
- 2) 本稿でも先例にならって耳状突起としたが、この名称の弊害は大きい。諸磯c式口縁部に装飾される耳状突起と安易に結びつき、如何にも型式学的序列をなすかのような名称だからである。実際には、この耳状突起は時期も地域も広範に採用される装飾突起で、装飾される位置を多少下方にするが中期初頭以降にも見られる。抑も突起か装飾要素かという問題はあるが、半円状突起など別の系列名称をつけたほうが良い。
- 3) この間にも、藤森栄一により踊場式の縮小(藤森1966)など様相は混迷を呈する。
- 4) 綾線文(結節縄紋)の横位から縦位への変遷は定説化したきらいがあるが、小野の系譜は①横位、②横位+縦位、③横位、④縦位+横位という段階を想定したものである。また円筒下層から派生した横位綾線文が南東北・関東に引き継がれるが、下小野式や五領ヶ台式では縦位の綾線文が目立つようになる(小野1980)という土器の多寡により導かれている。下小野式の位置づけも含めて、改めて変遷を考える必要がある。
- 5) 実際には、関東の阿玉台Ⅱ式に至るまでの緻密な編年が示されているが、本稿と関わりのある中期初頭前半の五領ヶ台Ⅰb式までに限って引用した。ただし、表中では複数の系統が入り混じる前期末葉・中期初頭の土器群が存在するなかで、十三菩提式などの系統の集合体としての「型式」と、地域に代表的な下小野などの「系統」名が混在する、とある。詳しくは今村2010参照。

図版出典

図1：出野尾洞穴遺跡 平面図・土層断面図・出土区(千葉大学考古学研究室 2012) 図2：出野尾洞穴遺跡 出土遺物出土層位(千葉大学考古学研究室 2012) 図3：出野尾洞穴遺跡 出土土器復元図(筆者作図) 図4：東山王貝塚出土土器(植月・松田 2000) 図5：本稿における前期末葉の遺跡(筆者作図) 図6：北陸の様相(真脇遺跡：高堀 1986、小重遺跡：小池 2002、水無神社附近遺跡：神村 1996、柳田遺跡：島 2006) 図7：新潟県北部 上野東遺跡の大木6式(上野東遺跡：高橋ほか 2006) 図8：三上の変遷案(三上 1987) 図9：小梁川遺跡出土土器(相原 1986) 図10：中部地方の様相(1)(1・2：島田 1987、3・4：武藤 1968、5：宇賀神誠司 1991、6：神村 1996、7・10：三上 1987、8：百瀬・功刀 1992、9：依田ほか 2011) 図11：中部地方の様相(2)(11：三上 1987、12・20：百瀬 2001、13：中山 1987、14：内堀ほか 1995、15：島田ほか 1981、16・17：和田 2007、18：山下 1990、19：掘田・鈴木ほか 2000、21：金井ほか 1989、22：武藤 1968、23：会田 1974) 図12：関東の様相(1～3：金子 1996、5：木村 1994、6：山形 1985、7：坂上・倉沢 1995、8：木村 1992、9：戸沢・鶴丸 1982、10：千野・阿部 1983、11：安孫子・北原 1983、12：赤星・塚田 1973、13：坂本ほか 1995、14：坂本ほか 2007) 図13：今村啓爾による編年案：(今村 2010) 図14：出野尾洞穴遺跡出土土器(1954年調査)(千葉大学考古学研究室 2012) 図15 鉦切洞窟・大溝遺跡 前期末葉の土器：(金子ほか 1958、小金井 1981)

引用・参考文献

- 赤塩仁・三上徹也 1994「下島式・晴ヶ峯式の再提唱とその意義－縄文時代前期末葉土器群の型式変化を通して－」『中部高地の考古学』
IV、長野県考古学会
- 麻生優 1954「十三菩提式土器の再吟味」『貝塚（考古ニュース）』No.59
- 今村啓爾 1974「登記原遺跡の縄文前期土器と十三菩提式土器細分の試み」『とけっぱら遺跡』登記原遺跡調査会
- 今村啓爾 2001「十三菩提式前半期の系統関係」『土曜考古』第25号
- 今村啓爾 2010『土器から見る縄文人の生態』同成社
- 小野真一 1980「縄文土器の様式及び型式と編年」『常陸伏見』伏見遺跡調査会
- 加藤三千雄 1996「北陸における縄文時代前期末葉土器群の展開（1）－福浦上層式 真脇遺跡出土土器資料を中心として－」『石川県考古学研究会々誌』第40号
- 金子直行 1999「縄文前期終末土器群の関係性－十三菩提式土器と集合沈線文系土器群の関係を中心として－」縄文セミナーの会・編『縄文土器論集－縄文セミナー10周年記念論集－』六一書房
- 甲野勇 1932「関東に於ける縄紋式土器の一新型式に就いて」『史前学雑誌』第4巻第3号第4號
- 小島俊彰 1989「十三菩提式土器様式」小林達雄・小川忠博『縄文土器大観』1 草創期・早期・前期
- 小林謙一 1991「東関東地方の縄文時代前期末葉段階の土器様相－側面圧痕土器及び全面縄文施文土器の編年的位置づけ－」『東邦考古』15、東邦考古学研究会
- 館山市史編纂委員会 1981『館山市史』国書刊行会
- 長崎元廣 1997「中部地方の縄文前期末・中期初頭期における土器型式編年論の系譜と展望（1）」『長野県考古学会誌』83
- 長崎元廣 1998「中部地方の縄文前期末・中期初頭期における土器型式編年論の系譜と展望（2）」『長野県考古学会誌』84・85
- 中野純 1998「鍋屋町式土器と福浦上層式土器の再編素描－その編年的再構築の試み－」『新潟考古学談話会会報』第18号
- 西村正衛 1984『石器時代における利根川下流域の研究－貝塚を中心として』早稲田大学出版局
- 芳賀英一 1985「大木5式土器と東部関東との関係」『古代』第80号
- 藤森栄一 1934「信濃上諏訪町踊場の土器」『人類学雑誌』第49巻第10号
- 藤森栄一 1966「中部高地中期初頭土器縄文式土器」『富士国立公園博物館研究報告』第16号、山梨県立富士国立公園博物館
- 細田勝 1996「縄文前期終末土器群の研究－地域差と系統差の統合的解釈に向けて－」『先史考古学研究』第6号
- 松田光太郎 2000「東関東における縄文前期末葉土器群の諸様相－粟島台式土器の再設定－」『神奈川考古』第36号
- 松田光太郎 2002「関東・中部地方における十三菩提式の変遷」『神奈川考古』第38号
- 山口明 1980「縄文時代前期末葉鍋屋町系土器群の動態」『長野県考古学会誌』39、長野県考古学会
- 山口明 1984「中部地方における前期末葉土器と鍋屋町式土器」『長野県考古学会誌』48、長野県考古学会
- 山内清男 1937「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1
- 山内清男 1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会
- 八幡一郎 1934「関東石器時代遺跡系譜一」『ドルメン』第3巻第4號
- 吉田格 1954「関東」『日本考古学講座』3 縄文文化、河出書房
- 和田哲 1973「前期末葉土器の問題」『古和田台』船橋市遺跡調査会
〔東北（宮城県・福島県）〕
- 相原淳一 1986『小梁川遺跡遺物包含層土器編』宮城県文化財調査報告書 第122集
- 芳賀英一 1984『冑宮西遺跡』会津高田町教育委員会
〔関東（群馬県・埼玉県・東京都・千葉県・神奈川県）〕
- 赤星直忠・塚田明治 1973『横浜市室ノ木遺跡』横須賀考古学研究会研究報告 2
- 安孫子昭二・北原實徳 1983「小山田 No.13 遺跡」『小山田遺跡群 II』小山田遺跡調査会
- 植月学・松田光太郎 2000『東山王貝塚・イゴ塚貝塚』市川市教育委員会
- 江森正義・岡田茂弘・篠遠喜彦 1950「千葉縣香取郡下小野貝塚發掘報告」『考古学雑誌』第36巻第3號
- 金子直行 1996『八木上／八木／八木前／上広瀬北／森坂北／森坂』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 第165集
- 金子浩昌・和田哲・玉口時雄 1958『館山鉦切洞窟』千葉県教育委員会
- 木村收 1992『内匠諏訪前遺跡・内匠日影周地遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第138集
- 木村收 1994『白倉下原・天引向原遺跡 II』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第172集
- 小金井靖ほか東洋大学未来考古学研究会・編 1981『千葉県安房郡千倉町埋蔵文化財調査報告書－健田遺跡関連第5次調査－』
朝夷地区教育委員会

坂上克弘・倉沢和子 1995『桜並遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 XVIII

坂本彰・鈴木重信・倉沢和子 1995『花見山遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 XVI

坂本彰ほか 2007『北川貝塚』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 39

千野裕道・阿部祥人ほか 1983「No.769 遺跡」『多摩ニュータウン遺跡-昭和 57 年度-(第 5 分冊)』、東京都埋蔵文化財センター調査報告 第 4 集

千葉大学考古学研究室 2012『千葉県館山市 出野尾洞穴遺跡 発掘調査概報』

戸沢充則・鶴丸俊明 1982『多聞寺前遺跡 I』多聞寺前遺跡調査会

山形洋一 1985『鎌倉公園遺跡』大宮市遺跡調査会

[中部(長野県・山梨県・岐阜県)]

会田進 1974『扇平遺跡』郷土の文化財 7、岡谷市教育委員会

宇賀神誠司 1991「栗毛坂遺跡群 A 地区」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 2 - 佐久市内その 2-』長野県埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書 12

内堀信雄ほか 1995『御望遺跡』岐阜市教育委員会

金井安子ほか 1989「山梨県上野原遺跡第 14 号住居出土の土器」『青山史学』第 11 号

鈴木孝志 1957「長野県北安曇郡松川村鼠穴桜沢遺跡」『考古学雑誌』第 42 巻第 2 号

神村透 1996『水無神社附近遺跡発掘調査報告書』木曾福島町教育委員会、長野県土地開発公社

武藤雄六 1968「長野県富士見町籠畑遺跡の調査」『考古学集刊』第 4 巻第 1 号

百瀬忠幸 2001「万場遺跡」『長野県木曾郡大桑村 中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』

百瀬一郎・功刀司 1992『鴨田遺跡』茅野市教育委員会

島田恵子ほか 1981『上の林遺跡(第 1 次・第 2 次)』箕輪町教育委員会

中山誠二 1987『上の平遺跡 第 4 次・第 5 次発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 29 集

掘田一浩・鈴木隆雄ほか 2000『上原遺跡 II』岐阜県文化財保護センター調査報告書 第 54 集

三上徹也 1987「大洞遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 1』(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 1

島田哲男 1987「白神場遺跡」『松本市赤木山遺跡群 I』松本市文化財調査報告 No.34

山下孝司 1990『北後田遺跡』韮崎市教育委員会

依田幸浩ほか 2011『美通遺跡 B 区』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 275 集

和田和哉 2007『名篁遺跡』山形村遺跡発掘調査報告書第 13 集

[北陸(石川県・新潟県・富山県)]

小池義人 2002『小重遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 108 集

高橋保雄ほか 2006『上野東遺跡・現明嶽遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 160 集

高堀勝喜・監修 1986『真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団

島瑞穂 2006『柳田遺跡発掘調査報告書 II』朝日町発掘調査報告書 9